

探訪 北の風景 28

いにしえ街道 檜山管内・江差町

青木和弘

道」は下町部分の津花町から姥神町を通り中歌町に至る沿道のことだ。「中村家」や「横山家」など、漆喰塗りの純和風の商家、問屋建築や社寺建築、大正から昭和初期の北海道様式とも言われる下見板張りの和洋折衷建物などが軒を連ねている。道路もところどころ緩やかに湾曲し、クランク状の屈折もあるので変化がある。車道は白っぽい脱色アスファルトを使い、歩道は自然石を敷き詰めている。

実はこの街路、昔からのものではない。歴史的建造物が多いが、景観を重視しながら道路の拡幅や電線の地中化、歩道の整備など、住民の日常生活の利便性に配慮した街づくりで実現した新しい風景である。美しい景観を後世に残し、訪れる人にも、町民にも魅力的なまちにして、観光客誘致を図りたいという思いが実現した。

この事業は、1988年にスタートした北海道新長期総合計画の戦略プロジェクト、「歴史を生かすまちづくり」として始まった。

江差町は、北海道南西部の檜山振興局所在地。人口8145人（6月末現在）の漁業の町で、人口減少が続く過疎の町でもある。近年、史跡や景観を活用した観光事業に力を入れている。北海道の中でも古くから和人が訪れ、18世紀からは北前船が往来し、ヒノキ材とニシン漁で繁栄した。問屋や蔵、商家、それに寺社などの歴史的建造物や史跡が残る「いにしえ街道」（全長1090メートル）を歩いてみた。

江差町は89年、道から「歴史を生かす街並み整備モデル地区」の指定を受け、道路の拡張と下水道の敷設、歴史的景観の整備に取り組んだ。地区内の建物の壁面位置や建築物の高さ、容積率制限、意匠も条例などで定めた。さらに電線の地中化、公園や案内板の整備なども行い、2004年に街路事業が完成した。事業費は総計170億円を費

江差港に係留展示されている開陽丸やした。その後も建造物の保全・整備費用の助成制度は町単独の事業として続けている。ちなみに景観維持への助成額は事業の2分の1で最高200万円だ。



土地の所有者が高齢になると、維持費の負担が重くのしかかる。往時をしのばせる軒を連ねた街並みを維持するのは簡単なことではない。

江差町には見どころが数多いが、これからの季節は、江差最大の祭り「姥神大神宮渡御祭」だろう。毎年、8月9〜11日に開かれ、例年5、6万人が訪れる。祭りの起源は370年ほどさかのぼり、武者人形や能楽人形、歌舞伎人形などを配した、豪華な13台の山車（ヤマ）が、吹き流しや錦の御旗をなびかせて、祇園囃子につけて町内を練り歩く。いにしへのニシン景観を現代に伝える夏祭だ。

9月には江差追分全国大会が江差町文化会館である。今年は9月16、17の両日が予選会で、18日





歴史的建造物の保存と合わせて道路の拡幅や下水道敷設、電線の地中化などが行われた「いにしえ街道」。左側の建物は1845年に町会所として建設された木造建築で1993年まで町役場だった。現在は無料休憩所になっている



「そばやまげん」は100年以上前の土蔵を改装した店舗。江差町の緋川（うぐいがわ）町で取れたそばだけを使い、自店の石臼で自家製粉した挽きたてのそば粉で手打ちしている。場所は江差町中歌町70（いにしえ街道沿い）にある

が決戦会だ。江差町役場の隣にある江差追分会館・江差山車会館では、展示資料のほか、江差追分や伝統芸能の実演（4月末～10月まで）が観賞でき、追分道場で指導も受けられる。また、姥神大神宮渡御祭の由緒ある山車のうち2台を1年交代で常設展示している。

さらに、明治維新の箱館戦争に登場して座礁、沈没した戦艦、開陽丸もぜひ訪れたい。1990年に復元された開陽丸が江差港に係留され、船内が博物館になっている。

* * *

江差町へは札幌からの直通交通機関がない。JRで八雲駅まで行き、そこから函館バスになる。マイカーなら4時間半ほどだ。東北や東京方面からは北海道新幹線で木古内駅から函館バス。函館からは函館バスの直通路線がある。